台上の月

中山義秀

台上の月

新潮社

台上の月

昭和三十八年四月十五日印刷
昭和三十八年四月三十日発行

定価三四〇円

著者　中山義秀

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
東京(三)七二一一九　振替東京八〇八

印刷　株式会社金羊社
製本　神田加藤製本所

〈落丁本はお取替えいたします〉

台上の月

装幀

高山辰雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

物語は必ずしも事実ではない

一

横光利一の初期の作品に、「月夜」という短篇がある。発表は大正十二年、時事新報とあるから、横光二十五歳の時である。

その年の四月、私は早稲田の英文科をでて、三重県立津中学に赴任し、九月には関東地方に大震災がおこった。

「月夜」の末尾は、次のように終っている。

二人が丁字形の辻まで来た時、一方の道から肌脱ぎになった若い男が旧劇物の真似らしく、頭の上で両手を振り振り、「えい、やッ、」と云いながら、これもひょろひょろして歩いてきた。すると伊室もすぐその真似をし始めた。そして、だんだんその男の方へ近よって行くと、その男も伊室の側へ寄って来て、

「何を小癪な。」と芝居の口調で云った。

伊室は「えいッ。」と云うと男の裸体の胴を右手で斬った。男はそれを受けとめようともせ

ずにまた、「えいッ。」と声をかけると伊室の肩を打った。
木山は二人の立ち廻りが今に本ものになるだろうと思った。そして、その時になれば男に飛びかかろうと思って身構えながら、月に照らされて光っている男の裸体の肩を見詰めていた。
この月光に照らしだされた裸体の男、が私なのである。事実はこうだ。その時私は朝田という中学時代の友達といささか酒に酔い、神楽坂から矢来、山吹町、鶴巻町を通って、早稲田大学の正面につきあたる、大隈侯邸の塀わきにさしかかったところであった。
季節は五月雨時分の夜の十二時すぎ、あるいはもっと遅く深夜にちかい刻限だったかもしれない。
その夜はたしか、満月だったように思う。雨期の月は大空では白銀のように輝いているが、地上の闇にふれると隈をおびた青白い閃光にかわってくる。
私と朝田は神楽坂の寄席帰りでもあったか、月に浮かれて深夜の街をあるいてきた。そして大学近く大隈邸横までくると、片側はコンクリートの高塀、他の側は戸をとざして灯を消した古書店街、人っ子一人通らず月影ばかりあざやかなのを幸いにして、私は朝田を相手に片肌をぬぎ、勧進帳の弁慶を演じだした。
棒を小脇にかかえて半身にかまえ、ひっ込みの六法を見せるヤマ場である。そこへ正面の塀陰から月光の中に、ぽっかり浮かびでてきた二人連れがあった。いずれもふさふさとした黒髪を後にたれた、中肉中背着流し姿の若者達——。

はっと気づいて一人の顔を見ると、横光だ。にこにこしながら近づいてきて、
「ははははは、中山、何をしている」
「やア」
と答えたまま照れていると、肩を叩いて、
「風邪をひくぞ。さア肌を入れるのだ」
酒を飲まぬ横光は、私がひどく酩酊していると思ったのであろう。衣服の袖をつかんで、私に着せかけてくれる。
「君達は、何処へ行く?」
「僕等か。我々は散歩だ。君は下宿へ帰って、もう寝るがいいぞ」
彼の連れは誰であったか、はっきり思いだせない。詩人の佐藤一英はすでに東京にいなかったはずだし、過日テレビの「私の秘密」でとうとうあてる事のできなかった、おなじ詩人の大山広光でもなかったようだ。
横光は昼は寝て、夜起きているような生活をつづけていた。モウパッサンの「水の上」に、月の光に照らされすぎると発狂する、といったことが記されてあったと思うが、横光も月光には一種の神秘性を認めていたらしい。
彼の短篇「名月」は、大盗石川五右衛門が月光に酔っぱらって、手下を斬る話であり、また先年三重県の柘植に建てられた彼の記念碑にも、

蟻台上に餓ゑて
月高し

の句が刻まれている。

「月夜」の構想もこの時の印象を基にしてなったのであろうが、二十枚足らずの作品で初期の習作程度のものにすぎない。発表されたのは大正十二年だが、こういう事実があったのは、その三、四年前のことだ。

当時私は、彼と離れて暮していた。横光と佐藤一英とが同宿していた、大学裏の松葉館に私がひき移っていったのは、私が早稲田の予科にはいった大正七年の秋、暑中休暇が終ってからだと思う。

それから翌年の春、佐藤が予科を退学して、郷里へかえるまで、三人同じ下宿にいたわけだ。そして私は横光から初めて、文学の開眼をうけたのだが、それはまだうわべばかりのことで、私は佐藤がいなくなると間もなく、松葉館を出て中学の同級生朝田と暮すようになった。その方が気が楽だったためである。

私より二つ年上の横光は、二年前一度早稲田の文科に入学したのだが、中退して郷里の栃植へ帰っていた。二年後また上京して私と同級になった。その空白の二年間、彼は真剣に文学ととり組み、文学をもって身をたてることを、決意してきたもののようである。

彼は旧約聖書の文章を愛誦していたが、一時教会に通っていたこともあったようである。松葉

館の東南に面した、二階六畳の私の部屋に彼が遊びにきて、たまたま稽古三味線をもてあそんでいた折柄、女中が彼のもとに客のあることを知らせにきた。

客の名を耳にすると横光は三味線をほうりだすなり、あわてて階下の自室へとびかえって行った。後で聞くと客は教会の牧師で、横光が教会に見えなくなったのを気づかい、安否をたずねてきたのだそうである。

牧師がわざわざやって来るくらいだから、彼は以前は熱心な信者だったのであろう。しかしその後、彼が教会へ行った模様はない。文学に身をささげる決意をかためた彼は、文学以外の一切を抛棄してしまったかのように考えられる。

私はある時君主政体について、横光と議論したことがある。彼は洗礼をうけたクリスチャンかどうかは知らないが、その教義の信奉者として、当然人君否定論者だった。私がしつこく彼の論説に反対すると、彼は私の盲目ぶりに匙をなげて黙ってしまった。付焼刃の屁理屈をならべて、彼に楯ついたにすぎない私は、いつか彼に屈服してその感化をうけ、ヒュウマニズムを精神の培養土とするようになった。

戦争後横光は心ない若人達から、戦争犯罪人として告発され、救いがたい神秘主義者として嘲けられたが、その若人達の誰よりも横光は真実の人であり、ほんとうの愛国者だったと信じている。

「月夜」にはまた、主人公が下宿の女中に、結婚を申込むことが書いてある。横光は女性にもて

た。彼のように女性の心情を理解して、思いやりのある慎しみ深い態度にでれば、誰しも彼を敬愛して信頼せずにはおられまい。

松葉館には出戻りの婦人がいた。老年だった主人夫婦の姻戚の女性で、私達より年長のようだったが、身体つきがよくかなり美しくさえあった。この婦人が女中の手伝いをして、客室に食膳をはこんできたりする。

松葉館は二流の下宿屋で、二十人足らずの学生がいたが、それぞれこの婦人の自室にあらわれるのを、内々心待ちしていたようだ。そして彼女が現われると愛想よく迎えて、映画の切符を与えたり、半襟をやったりする模様であった。

横光は古顔なので、主人夫婦や女中達から親しまれていた。彼はこの婦人に何もくれたりしなかったが、彼と佐藤の部屋がならんで、主人夫婦の居間や台所に近かったせいもあるのか、婦人はよく二人の部屋へ遊びにやってきた。

婦人は商科や法科、政治科の学生達とちがって、貧しくはあっても真面目で心優しく穏しい、文科の学生である二人に、好意をよせていたに違いない。

「おい中山、昨夜あの婦人が、僕の部屋へやってきたよ。僕の膝の上に、臀をおろして動かないのだ。僕は女性に抱きつかれた場合、どんな気持になるかためしてみたが、べつに何でもなかったな」

私は彼の言葉通りを信じた。私はその時かぞえて十九歳、まだよく女性を知らなかったが、横

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

光も同様だと思っていた。

長髪の横光は顔色が青白く、痩せていた。ことに両手の指はか細く骨ばっていて、老人のようにつやがない。毎日徹夜をつづけている不健全な生活と、自室に閉じこもったなりほとんど外出しない運動不足と、過度にちかい喫煙が、健康色を失わせていた。

横光は中学時代、野球の投手だったほかに柔道をやり、とくに逆立ちが得意で、伊賀の上野の数十丈もあるかと思われる城壁の上で、逆立ちをやったという伝説もあるほど、よく均勢のとれた健康体の持ち主だったが、文学をやるようになってから、わざと彼の肉体を弱くした。

欲望の巣である肉体を、先ず殺してかからねば、といった彼一流の精神主義にもとづくのであろうが、同時にまたあまりに健康体だと、彼独自の作品が生れてこない様子であった。事実そう云って、彼の制作の秘密を、私に洩らしたこともある。

そんな風だから、彼の禁欲はむしろ自然のように思われ、女を膝にのせて憮然としている彼の有様が、目にうかぶような気がした。

ところが横光はすでに、女と同棲した経験をもっていた。それが「月夜」にある、女中の「里枝」である。

二

私が松葉館に移りはじめの頃だった、と記憶する。横光と私と知りあったばかりの時で、互に遠慮があった。

東北の山里に生れ田舎の町々を転々して育ってきた私は、横光のような人間に出会ったのは初めてであった。まったく類がない。彼が関西出身で、言葉に上方なまりのあるのも珍しかった。

私は彼から教わることが多いばかりでなく、彼の磨かれた人柄にひかれて、毎日彼の部屋をおとずれた。彼のところには、客が多かった。私と同様彼に魅せられて、寄りあつまってくる若人達である。

まれに、彼一人の場合があった。彼は痩せた片肱を、火のない瀬戸火鉢のふちにのせて、

「中山君、君は恋愛の経験がおありですか」

「いや、まだありません。田舎町の半玉に、空想の恋をしたことはあります」

「はははは、空想の恋か、なるほど」

「君にはおありですか」

横光はそれには答えず、

「君は僕の所へやってくる、詩人の富本を御存じだろう」

「ええ、髪をながくした、鼻の大きい男」
「そうそう、あの男が、僕の女を寝取ったのですよ」
「えっ、それでいて君の所へ、平気でやって来るのですか」
「それとは、関わりない」
「関わりない事はない。怪しからんと思いますね」
「まア、聞き給え」
横光は長髪を、ぶるっと震わせて、
「僕は夏休みを終って、郷里から東京へひきあげてきた。朝早く自分の借家に帰ってみると、どうだろう、富本の奴が僕の女性と、一緒に寝ておるではないか。僕は二人の寝姿を見た瞬間、あっと思ったね。まるで飲みほしたコップの麦酒の泡が、一つ一つ消えてゆくのを見つめているような感じだったよ」
「その形容は、面白い。それで後、どうしたのですか」
「どうもこうもないさ。僕はそのまま、引取ったよ」
「ふむ」
私は感心しなければならぬような気がして、
「嫉妬は感じなかったのですか」
「嫉妬は君、恋愛に付随する、必然の副産物だからね。僕はそれ以来、女性も友人も信じなくな

った」
「それはそうでしょう。ところで相手の女性は、何者なのです」
「下宿屋の女中ですよ、十六、七の。そいつは僕が、好きだったのだ」
「女中と世帯をもったのですか」
「君は下宿費節約のため、友人達三人で家を一軒借り、自炊をやったというではないか。あれですよ。僕もこの前早稲田へ来た時、それをやったのだ」
「富本君とですね」
「それに、も一人の福田、やはり鼻が大きくて色の黒い、――時たま僕の所へやって来るから、君も知ってるだろう」
「知ってます」
「彼等三人と、雑司ヶ谷に家を借りたのだ。ところが君、飯焚きや洗濯に困るだろう。僕等三人とも、無精者ぞろいだからね。それで、女中をつれて行ったのだ」
「雇ったわけではないのですね」
「そうではない。彼女の方からすすんで、跟いてきたのです」
「君が好きだったから……」
「まア、そうだったのだが、真実のところは分らん」
「しかし相手が下女で、君が長いこと留守だったとすれば、止むをえんでしょう」

「うむ」
「それにしても、君の所へやってくる、富本君の気持は分らないな」
「あいつは、人が善いんだ。とにかく、独占欲ってやつは、罰があたるよ、ね、君」
私はまた横光の小説の種明しをするようだが、彼はこの事件（？）をたびたび小説の材料に使っている。私にとってはその場かぎりの話であったが、横光にとっては四十九年の生涯における、たった一つの過失だったのだ。
横光の死後彼の親友川端康成によって、彼の遺稿が発表された。横光の前夫人君子の兄、小島勗（つとむ）の未亡人の手許に保存されてあったものだが、夫人は旅先きの川端をたずね、金に換えるつもりで持ちこんできたものらしい。意のごとくならないので、夫人は私の所へまで問題をもちこんできたことがある。
横光の話によると、彼は君子夫人が葉山で亡くなると、思い出の種となる物はみな葉山の借宅へ残してきたそうである。その後しばらく小島宅に同居していたらしいが、ある日手拭一本を腰にぶらさげて、その家を出たなり再び帰らなかった。
君子夫人の母から今度はその妹と一緒になるよう、しつこく迫られたからだという。川端のもとへ持込まれた、横光の少青年時代の習作や未定稿などは、家出の際小島宅に置きすててきたものに相違ない。つまり彼はそれまでの所持品一切を、葉山の家と小島家とに残して、裸になって飛びだしたわけである。

無所有の精神というよりも、むしろ彼の覇気のあらわれであろう。大正十五年横光二十八歳の時分で、当時彼は新進作家のトップをきり、新感覚派風の作品をしきりと発表して、日の出の勢いにあった頃だ。何物をももたなくても、彼自身がすでに、一個の黄金だったはずである。

数々の遺稿のうち、「悲しみの代価」一篇だけが発表された。横光死後八年目にあたる、昭和三十年五月、河出書房の文芸臨時増刊、「横光利一読本」誌上でであった。

それに、この作品についての川端康成の解説がついている。その解説を、必要にしたがって書きぬいてみると、『悲しみの代価』は横光君の私小説と読まれる危険がある。私はそれを最もおそれた。いろんな点から（これは）、横光君の結婚前の作品と考定される。横光君の結婚生活に取材したものではない。おそらく大正十年以前の執筆であろう。年齢にすれば数え年二十三、四歳のころかもしれない。多分数え年二十五歳前のものとして、これほど横光君の人間が率直に、そして切々と訴えるように出ている作品は、初期にも後期にもないと私は思う。これは横光利一という人の真髄の露出であろう。『悲しみの代価』が保存され、また発表されるのは横光君の意志ではないかもしれないが、横光君の初期の重要な作品、あるいは生涯の重要な作品として、発表しておいた方がよい理由はある」

この解説にあるとおり、私もまた初めて、「悲しみの代価」を読み、かつてない感銘をうけた。川端のいうように、横光の「この後の作品には、横光流の技巧と思考とによって、『悲しみの代価』のようには（彼の人間性が）露出していないのである」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.